



2024年8月
第752号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 中山洋司
〒254-0045 平塚市見附町6-18
電話 〇四六三(32)八八三一



百年後の教会

平塚教会牧師 北川一明

見よ、新しいことを私は行う。今やそれは芽生えている。

(イザヤ四三・19)

百年後の平塚教会を想像したこと、百年後の日本基督教団と世界のキリスト教の姿を思い描いたことがあるでしょうか。

マタイ福音書は、復活のキリストが「私は世の終わりにまでいつもあなたがたと共にいる」と言って閉じられます(二八・20)。キリスト教会は世の終わりまで続きます。しかしそれは日本基督教団が続くということではありません。キリスト教二〇〇〇年の歴史の中で、教会の姿は大きく変化しました。今も変わっていません。残るのは時代に適応できた教会です。

適者生存といっても、時代の変化に対応すれば良いわけではありません。教会独自の面を失えば、神がご

覧になったらもはや教会とはいえません。時代に合わせるだけでは教会組織は残っても信仰は失われます。時代を超越した永遠に変わらないものを保持しながら、同時に新しい時代からも支持される教会が信仰の拠点として残ります。

上質の商品やサービスを提供しながら、後継者が育たず維持・継承できなくなった事業が増えています。そこで伝統工芸の加賀友禅は体験プログラムで観光産業化したり、現代的な商品を作って生き残りを図っています。しかしそれには抵抗を感じる職人さんがあるでしょう。技術は残っても友禅の「こころ」のようなものが失われる心配があるからです。そのためでしょうが、京友禅は市場の評価が加賀友禅より高いだけに、かえて継承が難しくなっているそうです。たしかにこころが伝わらなければ技術だけ残っても意味がありません。

もっともこころは技術と共に伝わるという側面もあります。教会の維持と信仰の継承に似ています。教会組織が残っても信仰が続かなければ意味がありません。けれども教会がなくなれば信仰もなくなります。

目次

百年後の教会	牧師 北川一明 …1	チャイルド・ファンド・ジャパン 支援者グループ初会合	…4
神さまとともに歩む正しい道	比企能哉 …3	編集後祈	…4

信仰継承を考えるために、もう少し伝統工芸の例を続けます。職人が伝えようとしていることのうち、ここらは一〇分の一くらいかもしれません。そうだとしても、この部分だけを切り離してそれだけ伝えることは出来ません。一〇全体を伝えることで一のこのころも受け継がれてきたのです。職人はそれ以外にこのころを伝えるすべを知りません。そこで一〇の全てを残すことを必須と考え、コストが見合わず持続不能に陥るのです。

そこへ外から商品化の話が持ちかけられてくるのが昨今です。一〇全体ではなく一部を使って他を新しくして仕舞う提案です。今までのやり方ではコストが合わなからず。

それを邪道と感じて商品化を断った職人は、技術のみならずこのころの継承もできません。それに対して生活のためにやむなく提案に乗ると、大事なこのころは失われてしまう場合が多いでしょう。しかし希にはこのころが残る場合もあります。するとエッサイの切り株（イザヤ六・13）のように、残ったところから新たな若枝が芽を出します（同一一・1）。こうして伝統工芸は時代に合った新しい姿に変わります。

宗教は見えない神を崇めます。ですから仕来たりや習慣を変えることには大きな抵抗があるものです。それでもキリスト教会は、二〇〇〇年来仕来たりや習慣を変えざるを得ませんでした。頑なに過去の形を守った教会は信仰のレジエントとして模範にはなりませんが続きません。そうした教会がある一方で、世に残る教会も必要です。宗教の仕来たりは信仰からできました。ですから仕来たりや習慣を変えた教会の多くは信仰自体を失います。しばらくは生き残ってもいざれ継承する意味が見出せなくなり消えて行きます。それでも過去には仕来たりや習慣を変えたのに信仰を残すことが出来た教会がありました。そうした教会が姿を変えて次の世代を生み出しました。ローマ・カトリックから別れたプロテスタント教会もその一つです。

今は医療、福祉、教育系のことをすれば、教会も現代産業の中に入り込めます。時代のニーズに応えているし、伝えたい「このころ」とも無関係ではありません。そうした分野に事業展開すればしばらくは続きます。私たちも知恵は働かせるべきです。

ただし医療・福祉・教育は、信仰とは関係なくともできます。キリスト教に独自の面は、神を畏れ敬う精神が根底にあることです。神への畏れを失った医療・福祉・教育では教会が行う必然性がありません。たいてい教会から独立した後では世俗の事業に変わっています。

職人のこのころが技術と共に伝わるように、信仰を伝えるためには教会組織を持続可能なものにしなければなりません。ただ「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、福音のために命を失う者はそれを救う（マルコ八・35）」とある通りです。「教会組織を残す」という目的が自分のためでは、そもそも信仰のこのころに反する面があるのです。

百年後に残る教会に共通するのは、おそらく自分のためではなく世と隣人のために存在したという一点に違いありません。そうした教会は、神のために過去の自分を捨てる勇氣を持っているので、今までと同じ形ではないはずで。

私たち平塚教会も「神と世に対する奉仕のこのころ」という教会の大前提に立ったとき、喜んで新しい姿に変われるのでしょうか。

神さまとともに歩む正しい道

比企能哉

2024年6月23日は、沖縄の慰霊の日でした。多くの方が犠牲になられた沖縄戦から79年目をむかえました。

皆さんは、現在の日本や世界が平和だと思われませんか？

大変残念であり、悲しい現実ですが、平和とはほど遠いというのが実情です。

皆さんもご存知かと思いますが、沖縄本島では、辺野古新基地建设が、強行に進められています。軟弱地盤であるため、どんな対策、改良工事しても安全なものはお出来ないとされています。サンゴなど自然の生きものが生きるための海を破壊して、サンゴの居場所を取り上げてまで建設しようとしています。

沖縄本島では、米軍兵士による、痛ましい事件、事故が後を絶ちません。沖縄の人々からは、基地があることによる弊害を無くしたいということから、基地を無くしてほしい、本土に引き取ってほしいと、切実な想いでおられるのが実情です。

沖縄の近くにはいくつもの島があります。南西諸島と呼ばれています。その島々

には、自衛隊の基地が次々と作られています。近隣諸国と戦争になった時の拠点として利用がすでに始まっています。

しかし、島に住んでいる人々が、賛成して自衛隊の基地が作られたわけではありません。反対したにもかかわらず、国が強行に押し進めて作ったのです。

南西諸島の方々は、自衛隊の基地を無くしてほしいと、現在も声をあげています。

沖縄本島や南西諸島の方々の「基地を無くしてほしい」という声は、当たり前な事を言っているのです。

この声を届けるのに必要なのは、基地負担をお願いしている、本土の私たちの役目なのです。

5月に沖縄の現状がわかる映画を観ました。「戦雲」(いくさふむ)という映画です。感想を記したいと思います。

与那国島、石垣島、宮古島の3つの島々の人々は、長い間、日々、繰り返し、自衛隊の基地はいらない、島を戦場にしないでほしいとごくごく当たり前な事を言い続けてきました。

しかし、映画を観てみたところ、人々の声をまったく聞く耳もたず、戦争の最前線

として島を変えている姿を観ました。このようにした国に、私たちの声をさらに束にして、「基地はいらない」、「米軍はいらない」と国に言い続けていく事の大切さを強く感じることができました。

映画を観ていて、戦争になる直前まで、諦めずに声をあげていく事の大切さを知りました。

映画に出演していた島の方々は、島の人家族の命を大事にしたいと素直な心のうちを話されていました。

その話しを聞いて、島の人を含めて、日本の全ての人の命を大事にするため、戦争準備のための自衛隊基地の整備は止めて、撤去してほしいという願い、訴えを国にしていかないといけないと思いました。沖縄本島の米軍基地も無くすため、声をあげて出来る事をしていきたいと思えます。

6月23日の沖縄の慰霊の日を前に、沖縄戦で犠牲になられた方々の名前を読み上げる、『沖縄「平和の礎」名前を読み上げる集い』に二回オンラインで参加して名前を読み上げました。

一回につき、30分、亡くなられた方々の

名前を読み上げました。30分間、多くの方々の名前を読み上げました。多くの方々が犠牲になる戦争は起こしてはいけないと強く感じました。

毎週、普天間基地ゲート前では、基地は知らない、米軍は知らないという想いを讃美歌を歌うことで表しています。

神奈川県や東京都の3か所で、毎月、各所で一回ずつゴスペルを歌う活動を行っています。

僕も、そこに連ならせていただいています。沖縄の人々と同じ想いで、讃美歌を歌わせていただいています。私たちの想いが届くまで歌い続けていかれたらと思っています。

日本基督教団では、第33回教団総会で沖縄教区との「合同のとらえ直し」関連議案が全て廃案になりました。

日本基督教団は、沖縄の教会の声を聞かずに切り捨てたのです。その後、沖縄教区は、日本基督教団と距離をおいています。沖縄の教会の方々は、今も、心を痛めたまま苦しんでいます。今年の秋、沖縄教区に辛い想いをさせた教団総会から10

回目の第43回教団総会が開催される予定です。

人々が、間違った事をする事は神さまも知っておられます。間違ったことをしたことを悔い改めて、歩むことが大事です。日本基督教団に、今、求められていることです。

神さまとともに、正しい道を進み、喜ばれるおこないが出来る歩みをしていきたいと思っています。

『正義が造り出すものは平和であり正義が生み出すものは
とこしえに安らかな信頼である』

イザヤ書32章17節



沖縄県宮平和祈念公園
「平和の礎」

チャイルド・フアンド・ジャパン 支援者グループ初代会

貧困の中で暮らす子ども達の健やかな成長を継続的に支援するCFJ(チャイルド・フアンド・ジャパン)に賛同して、35年前に発足した支援者グループが、初めての会合を持ちました。

CFJは、教育・子どもの保護等の地域開発支援を通して、フィリピン・スリランカ・ネパールの子ども達を支援し、子どもを支える地域づくりを目指しています(子ども一人…月4千円支援)。

平塚教会の教会員は、35年間にわたりグループ毎に一人ずつの子を支援し、多くの子が学校を卒業し自立していききました。グループの会合では、現在の状況とこれからどうしていくかについて話し合いが行われました。

「編集後祈」

8月は、平和の祈りの月。第二次世界大戦終了、広島・長崎原爆投下…等々。日本が起こした戦争を知らない世代が増えていく中、教会はイエス・キリストの平和を、高らかに伝えていきたいものです。
(編集子)